

立場からカムライグ語を研究されている会員の方々を中心に、カムリ学での研究上大切だと思われる研究について、簡単な紹介をお願いすることになりました。従って、いろいろな分野の研究が紹介されることとなりますが、参考にさせて頂いて、是非、原典をお読みくださり、一層のご理解が深まりますようご期待申し上げます。会員の皆様方からのご投稿をお待ちいたしております。本欄に紹介される原稿をご参考の上、ご投稿くださるようお願い申し上げます。

当分の間は、原稿の到着順に掲載しますが、いずれ時機を見て、冊子に纏める時には、分野別に編集し直して、参照の便を図りたいと考えております。

## 研究紹介 Rhif 1 Deborah Fisher (2005) *The Princesses of*

*Wales*, Cardiff: University of Wales Press

藤沢 邦子

「プリンス・オヴ・ウェールズ」*The Prince of Wales* についての著書・評論・記事を目にする機会は多いが、「プリンセス・オヴ・ウェールズ」*The Princess of Wales* に関するものは少なく、特にその存在を歴史や社会という背景の中で考えた本は皆無であった。洋の東西を問わず、女性が一個人としてでなく「なにがしの母、娘、妻、あるいは姉妹」として生きた時代には、王族といえども正史の陰にいた女性についての信頼できる文献があまり残っていないこともその一因であろうか。

日本では「プリンセス・オヴ・ウェールズ」と言えば、故ダイアナ妃（離婚後は、定冠詞のない 'Princess of Wales'）に代表される「英国皇太子妃」のことと思う人が多い。しかし、本書の著者 Deborah Fisher は、ウェールズ人の視点をもって、より多様な「プリンセス・オヴ・ウェールズ」について紹介する。すなわち、エドワード王に征服される前のウェールズ人プリンセスである、**Angharad** アングハーラド (c.1080-1162)、**Nest** ネスト (c.1080-1115)、**Christin** クリスティン(12世紀)、**Gwenllian** グェンシアン (c.1037-1136)、もう一人のグェンシアン (1282-1337) などから筆を起し、ウェールズ人君主にイングランド王家やノルマン貴族から嫁いできた **Joan** ジョーン (c.1195-1237)、**Izabella de Braose** イザベラ (13世紀)、**Eleanor de Montfort** エレナー (d.1282) に触れ、さらにオワイン・グリンドゥールの妻 **Margaret Hanmer** マーガレット・ハンマー (c.1370-c.1420) についても言及する。いずれも史料が少ないので残念ながら短い記述だが、彼女たちが紹介された意味は大きい。

現在の定義では、プリンセス・オヴ・ウェールズとは1301年以後にウェールズ君主領 (Principality) を継承した皇太子の配偶者のことである。この「正式の」皇太子妃が700年後の今日までわずか9人しかいないという事実は、英国史の興味深い一面を示している。同じ700年間に皇太子は21人いたが、病気や

暗殺により早世したり、皇太子時代に結婚しなかったり、配偶者を得なかった人が多いのだ（人数についてはプリンス・プリンセスともに異説もある）。またすべての国王が皇太子を経て王位についたわけではなく、摂政に助けられる少年王もいた。既婚の後順位の王位継承権者が、皇太子の急死・譲位・廃位といった事情で王となった例もあり、その妻は皇太子妃を経ることなく、王妃に登ったのである。国王に女兒しか生まれなかった場合には、皇太子は空位のまま、第一王女（Princess Royal）が王位を継承した。

本書における「正式の」プリンセス・オヴ・ウェールズは **Joan of Kent** (1325-1385)、**Ann Neville** (1456-1485)、**Katherine of Aragon** (1485-1536)、**Caroline of Ansbach** (1683-1737)、**Augusta of Saxe-Gotha** (1719-1772)、**Caroline of Brunswick** (1768-1821)、**Alexandra of Denmark** (1844-1925)、**Mary of Tech** (1867-1953)、そして **Diana Spencer** (1961-1997) の9人である。4人が英国生まれ、3人がドイツ生まれ、デンマークとスペイン生まれが一人ずつであった。著者はこれらのプリンセス・オヴ・ウェールズの生涯を略述し、その役割や存在感や臣民との関係だけでなく、それぞれの夫や子どもや義父母（すなわち国王・王妃一時に女王・王婿殿下）との関係にも、女性ならではの視点で言及する。非ウェールズ人である「プリンセス・オヴ・ウェールズ」達はその称号やウェールズをどう捉えていたのか、逆にウェールズ人はプリンス・オヴ・ウェールズ夫妻をどう捉えてきたのか、なども伺い知ることができる。「プリンセス・オヴ・ウェールズ」という称号についての法律はなく、慣習と諸般の事情を考慮してバッキンガム宮殿がその授受を決定してきた。現皇太子チャールズの妻カミラは、「皇太子妃」ではなく「コーンウォール公夫人」である。さて、将来はどうなるのであろう。

著者 **Deborah Fisher** は 1955 年生まれ、オックスフォード大学で **Classics/Modern Languages** 修士号を取得。個人的に歴史や考古学の勉強を続け、現在はカウブリッジ博物館の学芸員のかたわら、フリーランス作家として活動している。これまでに *Who's Who in Welsh History*、*A Gower Story* などの著書があり、雑誌などへの寄稿も行なっている。2006 年秋にはウェールズ大学出版局の委嘱による *Princes of Wales* が出版される予定である。グラモーガンに夫と子どもたちと在住。

原著は 150 頁ほどのポケット・ガイド版だが、英国史を女性の視点とウェールズ人の心情を交えて見ている面白さがあり、一気に読ませてくれる。日本語版の拙訳『プリンセス・オヴ・ウェールズのすべて』（仮題）が大阪創元社から出版される予定であるが、それには日本人読者向きに、年表、系図、写真、紋章の図版などが加えられる。